

〈国語〉

伝え合いを支える語彙力を育む指導の工夫

— 言葉カード・学習用語を取り入れた振り返りの交流を通して（第2学年） —

石垣市立川平中学校教諭 小野寺 紀 子

I テーマ設定の理由

情報化社会の発展や人工知能（AI）の飛躍的な進化など、将来の予測が難しい社会になってきている。このような背景を受け、学習指導要領では「学びに向かう力・人間性の涵養」、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」を掲げ、これからの子ども達に、豊かな人間関係を築きながら問題解決に向けて自分の考えを伝え相手の考えを理解する等、社会に生きるための資質・能力の向上を目指している。

国語科の目標では社会生活に必要な国語について特質を理解し、人との関わりの中で伝え合う力をつけ、言葉が持つ価値を認識するとともに言語感覚を豊かにすることが求められている。人との関わりの中で多様化する情報を理解し、考え、深めさらには自ら表現する力をつける必要があると考えられる。平成29年告示「中学校学習指導要領解説 国語編」において、「語彙指導の改善・充実」の中で「語彙は、すべての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。」と語彙の重要性を示している。さらには、「語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。」と示している。

本地区の生徒の課題として、語彙力の向上は長年言われている。本校生徒の平成31年度の標準学力調査において、当該学年の正答率は70.8%（全国70.4%）と全国とほぼ変わらない結果を残しているが、文章を読み心情を理解し表現する問題で課題が見られた。また、基礎的な慣用句の意味を理解する問題においても苦手な生徒が多く見られた。内容は理解できても語彙不足からどのように表現するか言葉を考えられないことが理由と考えられる。これまでの私自身の授業実践を振り返ってみると、語彙不足を補うために新出漢字の練習や語句の意味を調べる、習った故事成語や慣用句の日めくりカレンダーを作成するなど、生徒が言葉に触れる機会をとってきた。しかし、その学習が「何のために」行っているか「どのように活用していくものなのか」が見えづらい学習であった。習った知識を身につけ自分のものにするという取り組みが不十分だったため、既習した語彙を活用し思いや考えを表現し伝えることができないでいると考えられる。多くの語彙や、単元を学ぶうえで獲得することが必要な学習用語を活用して、同じ内容でも人に伝わるために様々な言い方で表現する力、つまり伝え合いを支える語彙力の育成を、国語科を中心として各教科において実践されなければならない。

そこで本研究では、単元の指導の一環として実践できる「振り返り」を活用し、語彙力の育成を図りたい。「読むこと」において筆者の考えを捉え、自分の考えを相手に伝え、相手の考えも理解しあう学習の中で特に「振り返り」を大切にして語彙力の育成を図りたい。表現の手助けとなる「言葉カード」を活用したり単元に必要な学習用語を使ったりして、学習の振り返りの中で学んだことをわかりやすく書いていく。さらに生徒同士で書いたことを交流し、同じ学びの中にも様々な言い方があることを知ること、語彙の量の獲得とともに多様な使い方も学び、質としての向上も同時に図れると考える。このように、言葉カードや学習用語を活用し人と関わりながら表現活動を継続することで、伝え合いを支える語彙力の育成が図れると考え本研究テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「読むこと」の学習指導において、学んだことを振り返るときに言葉カードや学習用語を活用して書き、交流することで、伝え合いを支える語彙力を育むことができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 伝え合いを支える語彙力について

(1) 伝え合いとは

平成29年告示「学習指導要領」では国語科の目標として「(2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。」と示した。さらに同年告示「学習指導要領解説 国語編」において、「伝え合う力を高めるとは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである。」と示した。国語科において社会に生きる人材の育成として伝え合うことを重要視し、その能力の向上のために授業展開が図られることが大切だと考えられる。また、平成30年文化審議会「分かり合うための言語コミュニケーション」において、「分かり合うためのコミュニケーションとは、複数の人が互いの異なりを踏まえた上で、情報や互いの考え、気持ちなどをやり取りし、理解し合い、その理解を深めることである。」とし「その中心となるのは、言葉によって伝え合うこと、つまり『言語コミュニケーション』である。」と示している。そして言葉による伝え合いの四つの要素「正確さ」「わかりやすさ」「ふさわしさ」「敬意と親しさ」を留意点として挙げている。それぞれの共通点として、「人との関わり」「思考・考え」「正確に理解」「適切な表現」があげられる。国語科において「伝え合い」とは、人との関わりや話し合い、意見の交流の中で、自分の考えや思いをまとめた言葉を通して正確に理解し合い、相手に伝わるよう適切に、ふさわしい言葉で表現することだと考えられる。本研究では教材内容について自分の考えや思いを人に伝えるためにわかりやすく、その場にふさわしい言葉を選び表現することができるよう授業展開を行いたい。

(2) 伝え合いを支える語彙力について

語彙力とは石黒圭(2019)は、ただ単に言い回しを記憶しているだけではなく、それらを適切に使うことができる力と述べ「語彙力＝語彙の量×語彙の質」としている。また、井上一郎(2003)は、語彙力は「言語表現の最小の単位である語について、その本質についての知識を持ち(知識力)、言語活動の場面において理解することができ(理解力)、自己の表現において使用することができる(表現力)語をどれだけ持っているかという能力の総称」だと述べている。両者の共通することは語彙量の面と活用できる質の面がそろって「語彙力」と言えると述べてることだ。国語の授業において「語彙力」とは、生徒に身につけてほしい語彙の量を増やすことと、表現活動において活用し表現できるという質をあげることの両方であると考えられる。

平成16年文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」において、語彙力の育成について「今後の国際化社会の中では、論理的思考力(考える力)が重要であり、自分の考えや意見を論理的に述べて問題を解決していく力が求められる。(中略)人間の思考は言葉を用いる以上、その人間の所有する語彙の範囲を超えられるものではない。情緒力と論理的思考力を根底で支えるのが語彙力である。」とし、表現活動を支えるものとして語彙力を挙げている。このように思考、表現活動の基盤となる言語能力を支えるのが語彙であると述べていることから、自分の考えをもち言葉に表すときに使用できる語彙がたくさんあることを目指し授業を展開することが必要と思われる。本研究において、伝え合いを支える語彙力とは、筆者の書き方の工夫や、主張を読み取り自分の考えや思いを振り返りに書く中で、表現の助けとなる言葉カードを活用しながら様々な言い方で表現できたり、相手に応じ言い換えたりすることができるようになることと考える。さらに交流することで適切に表現する方法や、他者の言い方を学び自ら活用することで、語彙としての量を獲得し質が向上してくると思う。以上のことをイメージとして示す(図1)。



図1 伝え合いを支える語彙力向上イメージ

2 振り返りと交流方法について

(1) 振り返りについて

平成29年告示「学習指導要領解説 総則編」の、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の中に「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること。」また、「これらの指導を通じ、生徒の学習習慣の定着や学習意欲の向上が図られ学習内容が確実に定着し、各教科等で目指す資質・能力の育成にも資するものと考えられる。」と示されている。三浦和尚（2009）は「一般に『学習の振り返り』という行為は『学習の評価』と考えることもできる。つまり、そこでの学習を振り返り、身に付いた知識や技能を確認（メタ認知）し、さらに今後の学習の見通しを立てるということになる。（中略）学んだことの充実感、達成感を味わうことになり、それは、学習への意欲といった態度的な側面の育成には必要なことであろう。」と述べている。振り返りは学習意欲を向上させ、学びのメタ認知を図るなど学び続けるために必要な学習ということになる。そのため振り返りの視点として教材で何を学んだのか、この学びは何に生かせるかといったメタ認知の役割をもたせつつ、単元で必要な学習用語や表現の助けとなる言葉カードを活用して書くなど、わかりやすく伝わる工夫をしながら、次へつながる振り返りができることも大切である。また、その際には語彙を広げるという観点から、「どう思ったか」「どう感じたか」といった、様々な言い方で書ける視点を入れる必要がある。本研究では振り返りの視点を前述のように具体的に指定してさらに感想が入るようにしていきたい。その視点の中で学びを振り返り、自分の考えに合う言葉を探し活用しながら、書いた内容を交流していく。他者がどのように感想を表現しているかを意識して交流し、言葉を共有することが多くの語彙に触れる機会になると考える。

(2) 交流方法について

国立教育政策研究所の『交流活動を工夫し活用する力を育成する取組の実践例』において、交流活動類型を①「出し合う交流活動」②「比べ合う交流活動」③「高め合う交流活動」④「磨き合う交流活動」とし、「各類型の目的」と単元や授業の展開における「場面の目的」を合致させる工夫について紹介している（表1）。交流活動は、その目的を生徒に明確に示すとともに何を交流の対象としているかを十分に理解させてから行うことが求められる。

本研究では教材での興味関心わかったことなどは①の交流を、考えたことを他者と共有し比較するときは②をとといったように交流を取り入れていきたい。その際は語彙を広げる事を念頭に交流を行うので、「なぜそう思うのか／同じことでもほかの人はどう言っているか」などを意識させて語彙に注目しながら交流するよう留意する（表2）。

表1 交流活動の類型と目的

①【出し合う交流活動】	②【比べ合う交流活動】
互いの興味・関心を交流したり、学習経験や生活経験を生かした見いだした課題を出し合ったりしながら、事象に対する興味・関心を高め、課題に対する認識を深める。	互いの事象に対する見方や課題に対する考え方を比較したり、学び方を参考にしたりしながら、法則や原理を理解し、学習の見通しを立てる。
③【高め合う交流活動】	④【磨き合う交流活動】
他者の見方や考え方を取り入れ、自分の考えを修正したり、強化したりしながら高め合い、それぞれの課題を解決していく。	これまでの交流活動をととして習得した知識や技能を実践的に活用したり、互いの活用や工夫を評価し合ったりしながら、活用する力を磨き合っていく。

表2 交流活動の目的に応じた交流の注目点

交流類型	振り返りの視点(獲得したい語彙)	語彙を広げるための交流の注目点
①出し合う	印象に残ったこと考えたこと(印象・感想の語彙)	他の人はどんな内容に対しどんな言葉で感想を言っているか
②比べ合う	考察はどのようにして書くとわかったか、今後どの学習で活かしたいか(感想・感情の語彙)	共通点はあるか、同じ事に対し友達はどうな風に感想を表現しているか
③高め合う	説明するときどんな工夫をしてどんな文章にしたいと思うか(内容・印象の語彙)	他の人の意見を聞いて参考になる(使ってみたい)表現はあるか
④磨き合う	学習で身につけたこと、活かしたいこと(印象・感情の語彙)	自分の表現で改善するところはあるか、使いたい表現はあったか

3 言葉カードと学習用語について

(1) 言葉カードについて

伝え合いを支える語彙力の育成において振り返りの中で感想を入れるとき、生徒の経験のみで語彙を活用して書くことには限界があると予想される。井上（2003）は「従来は、作品の語彙へ

の注目が強かったが、感想の語彙を与えることによって、読者の語彙を高めるものである。」と述べている。国語の授業において指導側が身につけてほしい語彙を示し、生徒が活用することで語彙は高められると考えられる。そこで中学生に身につけてほしい語彙を考えたとき、本地区採用教科書の巻末にある「感想を表す言葉（１年）」、「感情を表す言葉（２年）」を活用したい。似たような感情や考えの多様な言い方を使ってほしい言葉集として「言葉カード」を作成して振り返りの場面に使用できるようにする（図２）。そして交流の中で他者はどの言葉をどのように使っているかに着目しながら、聞くことで次回の学習につながるように授業展開を行う。

（２）学習用語について

なぜ学習用語を学ぶのか。工藤・中村・片山（2019）は「国語科の学習を充実させるためにはある程度、学習の観点や技術などに着目し、子どもたちが意識して使える技能としていかねばならない。」と述べ、そうした観点や技能についての概念を端的に表す言葉が「学習用語」だと定義している。具体的には「文の構造／根拠／段落」といった言葉である。また、『国語科重要用語辞典』では「学習用語は、『心情』『慣用語』といった学習内容や『音読』『推敲』といった学習方法（学習行為）に関する専門用語を指す。」とあり、「言語活動の各場面で適切かつ自発的にそれを使いこなすことが求められる。」と述べられている。本地区採用教科書では小学生の時から学習に用いる言葉として随時紹介されているが、学んでいるはずの用語を中学生になると、なんとなく使っていることが多くみられる。学習用語は子どもが学んだり振り返ったりするときに主体的に学習理解が進むように用意するツールであると考えられる。教師側は、指導事項と言語活動を関連させ、その中でどの学習用語が必要かを考えなくてはならない。本研究の単元は説明的文章で「意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解する／文の構成や展開、複数の情報を整理し内容を解釈すること」が主な学習内容となるので、学習目標と指導事項から「構成／事実／考え／主張」といった学習用語が考えられる。さらに単元を貫く言語活動として行う「文章を読み理解したことや考えたことを説明、文章にまとめる活動」に関わる学習用語として、「要点」「要約」が考えられこれらの学習用語をめあてと関連させていく。生徒は学びを深めたり表現の工夫を図ったりするときに学習用語をヒントとして活用し、文章に表したり交流をしたりすることで言葉への自覚を高めることにつながり語彙力を育むことができると考える。

言葉カード①			
〈感想を表す言葉ヒント〉			
目的・同じ事でも様々な言い方がある事を知り、使っていく事で言葉を広げよう			
①「使える」・・・意味を知って使える言葉に○をつけよう。			
②「使えた」・・・学習を通して使えるようになったら○をつけよう。			
☆気持ちを表したいとき		氏名(	
感動を表す言葉	意味・使い方例	使える	使えた
1 はっとする	思いがけない出来事にびっくりするさま。 「一・ような美しい色」		
2 じいんとする(くる)	感動や痛みのため、体がしびれるように感じるさま。 「胸にくる」		
3 等線に触れる	心の奥深くにある、物事に感動・共鳴しやすい感情を等の糸にたとえていった語。「心の等線に触れる言葉」		
4 目頭が熱くなる	深い感動のために、涙が浮かんでくる。 「苦労話に思わず」		
5 胸がいっぱいになる	悲しさやうれしさなどで心が満たされる。胸がつまる。 「初優勝の感激で」		
6 胸が熱くなる	感動がこみ上げてきて、胸がじいんとする。 「一・って涙が溢れる」		
7 心を打たれる	強く感動させられる。 「ラストシーンは一・れるね。」		
8 心を揺さぶられる	心に残るような強い印象があるさま 「一・出来事にであった」		
9 心に染み入る	心に深く入りこむ。しみじみと感じられる。 「家族愛が一・物語だね」		
10 感慨深い	強く感動させられる。 「ラストシーンは一・れるね。」		
11 感銘を受ける	忘れられないほど深く感じる事。心に深く刻みつけて忘れないこと。「深い一・」		

図２ 言葉カード

Ⅲ 指導の実際

- 1 単元名 あなたが知りたいバイオロギング調査を考える
教材名 生物が記録する科学ーバイオロギングの可能性ー（光村図書 ２年）
- 2 単元目標
 - ・意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解することができる。【知識及び技能】(2)ア
 - ・目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈できる。【思考力、判断力、表現力等】 C (1)イ
 - ・文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりできる。【思考力、判断力、表現力等】 C (1)オ

- ・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

3 本単元における言語活動

あなたが知りたいバイオリギング調査を考える

関連：読むこと（２）ア

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①文の構成、意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解している【(2)ア】	①読むことにおいて、目的に応じて複数の情報を整理しながら情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈している【C(1)イ】 ②読むことにおいて、文章を読んで理解したことや感が手たことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている【C(1)オ】	①積極的に相手に伝わるように今まで学習を生かし、構成や言葉を工夫して自分の思いや考えを伝えようとしている

5 単元の指導計画と評価計画（全5時間）

※観：観察、ノ：ノート、ワ：ワークシート 交：交流活動 内：内容、行：行為

次	時	学習目標	学習活動	指導上の留意点	評価規準	語彙力向上の工夫
第1次	1	文章構成を理解しバイオリギングについて要点をまとめる。	・学習の見通しを持つ。興味関心などを書く。・文章構成を捉えバイオリギングについて要約する。	・バイオリギングについて知り自分の考えを書くことを知らせる	知：文の構成を理解している。(観・ノ) 思①：バイオリギングについて要約している(ノ)	【振り返りの視点】 (交①) 文章の中で印象に残ったこと考えたこと ☆言葉カード(印象・感想・感情の語彙) ☆学習用語 内：構成 行：要点
	2	調査からわかった事実をまとめ筆者の考えを要約する。(検証1)	・本論を読み、グループで分担してまとめ、他のグループに伝える。・ペンギンの行動の意味をまとめる。	・調査内容をワークシートに作り短時間で作業できるようにする。	思①：ペンギンの調査から事実と筆者の考えを具体的に読み取っている。(ワ)	【振り返りの視点】 (交②) 考察はどのようにして書くかわかったか、今後どの学習で生かしたいか ☆言葉カード(感想・感情の語彙) ★学習用語 内：事実・考え 行：要約
第2次	3	本論での論理の展開の工夫を要約する。	・本論での説明のしかたの工夫は何か、事実と筆者の考えの他に何があるか着目して捉える。	・図や写真が効果的に用いられていることにも着目させ、文章との関連を考えて内容を読み取らせる。	思①：文章の構成や事実と考え、図やグラフの組み合わせに着目し、説明の仕方の工夫を捉えている。(ワ・観)	【振り返りの視点】 (交③) 説明するときどんな工夫をしてどんな文章にしたいと思うか ☆言葉カード(内容・印象の語彙) ☆学習用語 内：論理の展開 行：要約
	4	筆者の主張を具体的に言い換える。	・筆者が「バイオリギング」のどの点に可能性を感じているかを捉え、考えを班で共有する。	・抽象的な言い方の主張を身近な環境に目を向けさせて具体的に考えさせる。	思②：文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け自分の考えを書いている。(ノ・観)	・言い換える場面 (交③) 【振り返りの視点】 他の方の考えを聞いて考えたこと、参考にしたこと ☆言葉カード(内容・印象の語彙) ☆学習用語 内：主張、具体・抽象 行：言い換え
第3次	5	あなたが知りたい調査について文の構成を工夫し要約する。(検証2・本時)	・これまでの学びを序論・本論・結論の構成でまとめ、推敲する。・グループで発表する。・一文感想を書く。	・文の型のワークシートに記入しながら書けるようにする。	主：相手に伝わるように言葉を選び思いや考えを伝えようとしている。(ワ・観)	・一文感想(評価の語彙) (交④) 【振り返りの視点】 学習で身につけたこと、いかしたいこと ☆言葉カード(感想・印象・感情の語彙) ☆学習用語 内：文の構成の工夫、根拠 行：推敲、要約

6 本時の学習指導（第5時）

(1) 本時の目標

知りたいバイオリギング調査について文の構成を工夫し要約することができる

(2) 本時の評価規準

評価の観点	【主体的に学習に取り組む態度】
評価規準	相手に伝わるように言葉を選び思いや考えを伝えようとしている
評価方法	ワークシート・観察

(3) 本時の工夫点

場面	工夫点(手立て、方法)	理由
展開3～6	文章構成を工夫して前時まで学んだことをわかりやすく伝える文章を作成する。 発表を聞いて言葉カードを活用して感想を書く	単元で出てきている学習用語を再確認し学びにいかせるようにするため
8	振り返りの交流	語彙の獲得と向上

(4) 展開

	学習活動	形態	教師の支援(☆)と評価(■)
導入5分	1 前時の学びを確認する	全体	・構成を工夫し自分の考えをまとめることを知らせる
	知りたいバイオリギング調査について文の構成を工夫し要約する		
	2 めあてを確認する		☆電子黒板で学習用語について確認する

展開 35分	3 知りたい調査を序論・本論・結論の構成でまとめる	個人	☆ワークシート③を用意し今までの学びをまとめられるようにする
	4 完成した文章を推敲する	個人	■相手に伝わるように言葉を選び考えや思いを伝えようとしている(ワークシート・観察)
	5 書いたことをグループで発表する	グループ	B評価:言葉カードや既習事項を活用して序論・本論・結論の構成で調べたい動物と理由を述べている ☆言葉カードの活用
終末 10分	6 発表を聞いて一文感想を書く		
	7 振り返り ①この学習で役に立った(何が?どう役に立った?)こと、身についた(どんな力?)こと、活かしたい(何をするとき?)ことを150~200字程度でまとめる 8 振り返りの交流 グループで書いたことを共有する	個人 グループ	☆交流の目的(他の人ははどのようなことを学んだと感じているか、自分も生かせることがあるか)を伝え言葉を広げられるようにする

IV 仮説の検証

本研究の仮説に基づき、「振り返るときに言葉カードや学習用語を活用して書く」とことと「書いたことを交流する」という2つの取り組みによって、伝え合いを支える語彙力の育成が図れたかを、生徒のワークシート、振り返り用紙、授業中の観察、および検証前後のアンケートを基に検証する。

1 言葉カードと学習用語を活用した振り返り

事前のアンケートでは、「振り返りのときに自分の思いをうまく書くことができますか」という問いに肯定的な回答は66% (9名中6名)であった。しかし「自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることは好きですか」という問いには肯定的な回答は33% (3名)にとどまり否定的な回答が半数以上を占めた。理由としては「文の構成が難しい/文を書いたとき意味が分からないと言われた」などが挙げられた。振り返りは自分の思いやわかったことを書くという場面であるため、書けていると感じている生徒が多くいると思われる。しかし、人に伝えようとすると文の構成や言葉選びに悩んでいる様子が見え、書くことに難しさを感じていることがうかがえた。

(1) 言葉カードの活用

生徒の経験だけでは多くの語彙に触れるには限界があるため、これから始める単元の準備として「感想を表す言葉/感情を表す言葉」をまとめた言葉カードを普段から表現の助けとして使えるよう用意した。さらに、単元前に言葉カードの言葉の中ですでに使いこなすことができる言葉をチェックさせた(図3)。第1時から振り返りの視点を設定し(単元計画参照)振り返りを書くときには、表現したいことをうまく伝えるために言葉カードを活用できると意識させてみた。第1時、言葉カードの言葉の活用率は100%であったが、文と活用した語句のつながりを見ると適切に書けていない生徒も見られた。検証1の第2時では77% (9名中7名)の生徒が言葉カードの言葉を適切に活用して振り返りを書いていた。さらに検証2の第5時では88%

言葉カード①			
〈感想を表す言葉ヒント〉			
目的・同じ事でも様々な言い方がある事を知り、使っていく事で表現を広げよう			
①「使える」・・・意味を知って使える言葉に○をつけよう。			
②「使えた」・・・学習を通して使えるようになったら○をつけよう。			
☆気持ちを表したいとき	氏名()	使える	使えた
感動を表す言葉	意味・使い方		
1はっとする	思いがけない出来事にびっくりするさま。		
2いいんとする(くる)	感動や悔みのため、体がしびれるように感じるさま。		
3なやみ	胸にこくる		
4きんこく	心の奥深くにある、物事に感動・共鳴しやすい感性。涙の糸にたどたどしいった際。「心の〜」等様に用いられる。		
5きんこく	深い感動のために、涙が浮かんでくる。		
6きんこく	「空気が熱くなる」		
7胸がいつぱいになる	悲しさやうれしさなどで心が満たされる。胸がつまる。		
8胸が熱くなる	感動がこみ上げてきて、胸がじんじんとする。		
9心を打たれる	強く感動させられる。		
10心を動かされる	「ラストシーンは一々、ねえ。」		
11心を動かされる	心に残るような強い印象があるさま		
12心に染み入る	「〜」出来事であった		
13心に染み入る	心に深く入りこむ。しみじみと感じられる。		
14心に染み入る	「家庭愛が〜、物陰だね」		
15心に染み入る	強く感動させられる		

図3 言葉カードチェック

さらに検証2の第5時では88% (8名)の生徒が表現の助けとして活用し、適切に書いていた。特に、言葉カードにある「明快/具体的/抽象的」(「具体的・抽象的」は学習用語としても学習)という言葉が多く選択されていたので、生徒の振り返りを時間ごとに交流グループのメンバーと照らし合わせてみたところ、他の生徒が使っていた言葉をまねて表現するといった言葉の広がりが出ていた。例えば、ある生徒が振り返りに「明快」という言葉を使い表現していた。その後交流で他者の表

現を意識して聞いたことで、伝わりやすい言葉の使い方を学び複数の生徒が「明快」を表現に使うようになっていた。また「具体的／抽象的」という言葉も同様に交流後表現に活用する生徒が増えていた。このように言葉をたどっていくと少なくとも55%（9名中5名）の生徒が他者がどのように表現しているかを意識して言葉を共有し、自ら活用していたとわかった。

単元後、言葉カードのチェックを再度させたところ使用できるようになった語は学級の平均で事前29語から37語（83語中）に増えた。また検証前後のアンケートを比較すると「感想や考えを書くとき言葉カードは必要か」という問いに対し肯定的な回答は33%（9名中3名）から100%に変化した（図4）。言葉カードがあるだけでは感想や考えを書くことに生かせないと考えていたようであったが、実際に活用するとカードの有効性や必要性を生徒自身が実感したと読み取れる。

以上のように言葉カードを示すことで他者の表現に注目する、伝わるために言葉を選ぶなど様々な言い方で表現する姿が単元を通して見取ることができた。さらにグループでの言葉の共有が多く、語彙に触れる機会となり、語彙の獲得や活用する力の育成が図れたと考える。

(2) 学習用語の活用

対象単元では学習するのに必要な用語として「文の構成／要約／事実／考察」といった言葉をめあてに組み入れた（単元計画参照）。検証前後のアンケート「学習用語を知っている」について「はい」と回答した生徒は倍増した（図5）。さらに知っている用語を挙げてもらおうと「構成／要約／考察」といった本単元で使用した用語が多く出てきた。一方で、「学習用語を意識して学習している」については肯定的な回答は微増にとどまった（図6）。このことから学習用語を知ることと学習に生かすことを結び付けられなかったと考えられ、学習活動の中で学習用語をさらに意識させる教師の発問の工夫が必要であった。例えば、第2時「調査から分かった事実をまとめ筆者の考えを要約する」の中で事実と考え（考察）をまとめた後、その違いをどう見分けたのかなど、学びの過程を言葉にさせたり書かせたりすることも学習用語を意識させることにつながったのではないかと考える。ただ、学習用語

を振り返りに活用するという点では検証1の授業では88%（9名中8名）の生徒が行っており、検証2では次につながる意欲を表現する記述もあり100%の生徒ができていた。特に生徒Aは言葉カードをうまく使えなかったが、毎時間学習用語を用いて書けていた。検証2の第5時の振り返りでは「最初にやった構成についてでは序論・本論・結論それぞれがどんなことが書かれているかということが分かりました。またこの説明文の中で『事実・疑問・考え』が繰り返されているという工夫を見つけることができました（後略）」といったように時間ごとのめあてに沿って単元を振り返っていることから、めあてを意識して学習していたと推測できる。だからこそ学びの振り返りのとき、めあてに組み入れてある学習用語を使って書くことができたのだろう。

以上のことから学習の中で学習用語を活用することに解決すべき課題はあるが、何を学ぶのか指導事項を意識させるためには、学習用語を組み入れためあてはとても効果的だと考えられ

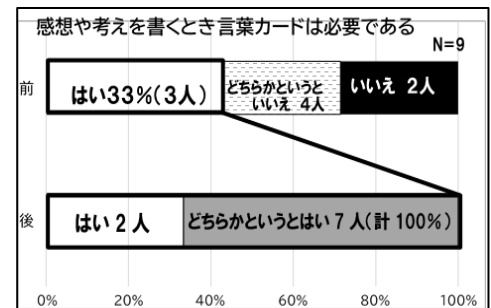


図4 言葉カードは必要である

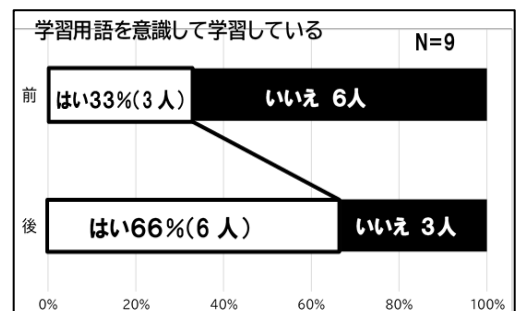


図5 学習用語を知っている

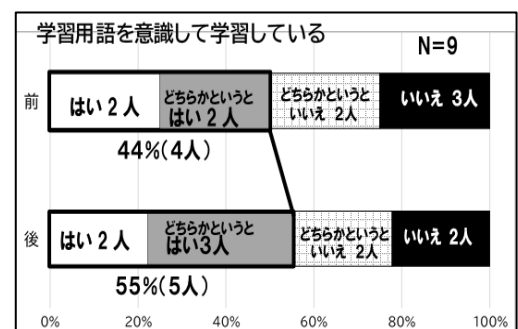


図6 学習用語を意識して学習している

る。さらに学習用語を意識して振り返りを書くことは意欲の向上や何を学んだかという学びの再確認や、わかりやすくまとめるときの表現の助けとしては有効であることがうかがえる。

2 振り返りの交流

振り返りを書くとき、感想の語彙や感情の語彙などを獲得し自分のものとして表現できるように「振り返りの視点」を設定した（表2）。また、書いたことを交流する意義（語彙を広げる）を持たせるために「交流の注目点」も各時間設定し（表2）気づいたことや次回への意欲をメモできる欄を振り返り用紙に用意した（図7）。検証前後のアンケート「意見交流は楽しいですか」という問いに対して肯定的な回答は88%（9名中8名）から100%になった。楽しい理由を挙げてもらおうと「自分が思わなかった意見が聞ける／参考になる」といったように自分の意見と比較し取り入れようとしていることがうかがえた。

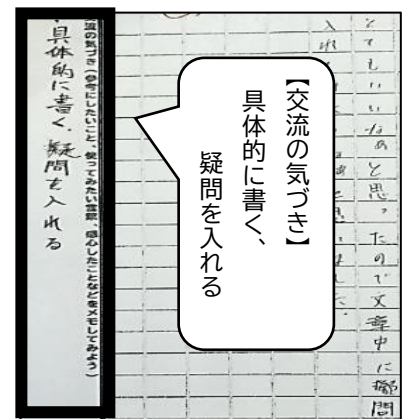


図7 振り返り用紙

生徒Bにおいては「わかりやすく書きたい」という表現が検証1の第2時では「わかりやすく具体的に書きたい」と変化していた（図8）。その後「みんなに納得してもらえるよう具体的に書きたい」となり、（「具体的／納得がいく」が言葉カードの言葉）、検証2の第5時では「文の構成を工夫し、伝えたいことを具体的に書くとわかりやすくなるとわかったので」と学習用語と言葉カードを活用して単元を振り返ることができている。生徒Bは、交流の気づきに「具体的にという言葉を使いたい／具体的に書くとわかりやすいのだとわかった」といったように交流を通してどのように表現したらよいかという視点で学んだことをメモし、次の振り返りに活用して書いていた。交流が言葉への自覚を高め、伝えるために表現をどう言い換えるかという質の向上へとつながったと考える。全生徒の振り返り用紙を確認すると5時間を通して交流で気づいたことや使っていた表現などをメモしている生徒は学級平均77%（9名中7名）、メモを生かして書いている生徒は55%（5名）であった。交流の視点、参考になる表現に注目するなどの意義を交流前に再確認し、メモをとれる時間を確保する取り組みがもう少し必要であった。

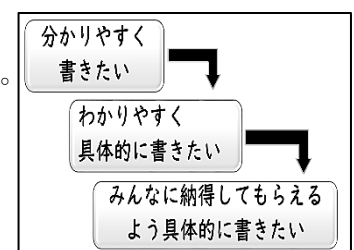


図8 生徒Bの記述の変化

以上のことから、書いた振り返りを交流することは生徒が自分の考えに合う言葉を探す機会や言葉を共有することにつながり、他者の参考となる表現を取り入れて伝わるためにわかりやすく書くといった語彙力向上に効果的であったと思われる。しかし交流での気づきをうまく書けない、書いても参考にして文を工夫することができない生徒もいることから、今後は前時の振り返りやよい気づきなどを紹介することと十分な時間の確保が必要である。

3 生徒の作品の記述

以前から語彙力において課題が見られた生徒Cの記述の変化（表3）とその記述に対する交流の様子、さらに全生徒の言語活動作品の記述などから検証する。生徒Cは適切に振り返りが書けているときもあるが、文のつながりとして不適切な表現も見られた。しかし第2時の表現について交流を通してどんな言葉を使うとよいかなどアドバイスを受けた後（図9）、第3時に語彙を適切に活用しわかりやすく書いた姿が見て取れた。第5時は単元を振り返った内容である。第4時も「わが意を得る」を使っていて意味や意図を聞かれていたが第5時、相手に伝わるよう言い方を変えてみるという工夫には至らなかった。授業中言葉カードの言葉をチェックしている姿をよく見かけたので思いを様々な言い方で表

表3 生徒Cの記述（抜粋）の変化

第2時	衝撃的に具体的に書くのが大変でした（中略）いつも通り平凡でした
第3時	作文を書くとき抽象的ではなく具体的に書いて読む人がわかりやすく、明快な文章にしたい
第5時	序論・本論・結論の書き方がよく分かった。パイオリングの調査を知り衝撃的なことがたくさんあった（中略）僕はあまりわが意を得られることができなかった。



図9 言葉カードを見て話し合う姿

現したいと考えての言葉の羅列だと推測できる。ただこのような表現をしたことで他の生徒が言葉に注目し考えるようになった。ほとんどのグループで交流するとき言葉カードを取り出し、言葉の意味を確認する姿や伝わるためにどの言葉を使った方がよいかなど、表現について丁寧に考える場面が見られた。また、参考になる表現を見つけ次回以降の表現として使うためにメモをする様子も見られた。交流して参考にする、アドバイスをするという設定をしたためだと考える。

検証2の第5時、言語活動「知りたいバイオリギング調査を考える」の文章作りでは評価規準である「相手に伝わるように言葉を選び考えや思いを伝えようとしている／言葉カードや既習事項を活用して序論・本論・結論の構成で調べたい動物と理由を述べている」に照らし合わせて評価すると77%（9名中7名）の生徒が規準を満たしていた。残りの2名の生徒は「具体的に書く／理由を述べる」という点で足りていない生徒であった。今後も文の構成を工夫し考えを書いていく学習が必要である。短い期間ではまだ伝え合いを支える語彙力がついたとは言えないが、伝えるためにどう言葉を使うか、どの言葉がよいか言葉は適切に使われているか、伝わる内容になっているかなど、語彙を獲得して相手を意識して言い換えるといった姿が見られた。

以上のことから、この取り組みで他者の表現について学び自分の考えに合う言葉を探すことができたと考える。そして、多様な語彙の獲得や活用する質の向上の育成に効果的だったと考える。

4 アンケートの記述からの検証

検証前後のアンケート「言葉をもっと知って使ってみたいか」という問いに対して事前と事後では肯定的な回答は88%（9名中8名）と変わらないが、「はい」と答えた生徒が倍増したことや（図10）、理由に「うまく伝えたいから」という記述も見られ、相手を意識して言葉を使おうという姿勢がうかがえた。「いいえ」と答えているのは同じ生徒である。理由として「今の言葉で伝わるから」と挙げ

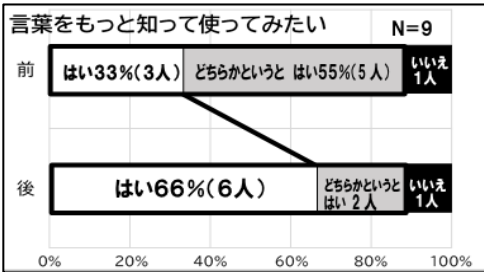


図 10 言葉をもっと知って使ってみたい

ている。相手に伝えるというより自分としてはという視点で言葉を捉えていることがうかがえる。交流や発表などで他の言い方と比較したり自分の表現に感想をもらったりすることで相手に伝えるにはと考えるようになるのではないかとと思われる。また「自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることは好き」という問いに対して肯定的な回答は33%（9名中3名）から55%（5名）に増加し、その理由として「わかってもらえてうれしい／理解してもらえる」といったように自分が書いたことを理解してもらえているという記述が増えたことから達成感を味わっている様子が見える。否定的な回答の理由として事前のアンケートにあった「文の構成が難しい／意味が分からないと言われた」といった記述は「当たっているかわからない／みんなと違うと不安になる」といった内容に変化していた。単元の学習が文の構成を理解するものだったこともあると思うが、言葉カードや学習用語を活用するという方法を示したことで、自分の考えを書くことに対して抵抗感が少なくなったのではないかと考えられる。しかし、自分の考えに不安を覚える生徒もいることから、改善策としてリード文を用意しておくといった方法も考えられる。単元終了後、自由記述の感想をみると言葉カードや学習用語について前向きな感想がほとんどであった。

言葉カードや学習用語を意識することで多くの語彙に触れ表現を選んで使う機会が増える、交流することで他の意見を取り入れられるといったようにめざす生徒像に近づいている様子が見て取れる（表4）。このことから生徒に言葉を示し学習用語を意識した学習を行い、書いたことを交流することは語彙を獲得し向上させることに有効であることがわかる。ただ、言葉カードや学習用語に縛られ自分の思いをう

表 4 単元終了後の感想の記述

言葉カード	・具体的に書けるようになった ・いろいろな言葉を使おうと意識できる ・いつも言葉が見つからなかったけどスラスラ書くことができた。 ・色々な言葉を知ることができしっかりと言葉を使った方がいいという気持ちになった ・感動を表すだけの言葉でもたくさんあるのだということを知った
学習用語	・学習用語があると振り返りや文が書きやすい(多数) ・今まで学習用語を振り返りで使えていなかったけど今回は何個か使えるようになった
交流	・使おうと思ったけど使えなかったことなど交流することでどう使うかなどわかった ・交流することで言葉が増えたなど感じた ・他の人の意見も取り入れることができた

まく表現できていない生徒も見られた。そのことは検証前後のアンケート「振り返りのときに自分の思いをうまく書くことができるか」という問いの回答に表れている。事前の肯定的な回答66%（9名中6名）が、事後では44%（4名）に下がって否定的な回答が半数以上になった。理由を挙げてもらうと「いい表現が見つからない」という内容が多かった。これは表現するときに言葉カードから伝わりやすい言葉を探そうと意識したから出てくる答えではないかと推測できる。説明文で活用しやすい言葉も言葉カードに入れる必要があったと考える。

このように言葉カードや学習用語を活用して振り返りを書き、交流することは言葉への自覚を高め、伝えるために適切に相手を意識して表現する力の育成にも有効であると考え。しかし今後説明文や物語文など学習内容に応じて活用しやすい言葉カードの改善とともに、自分なりにいい表現を見つけるための方法（語彙集めなど）を紹介することも語彙力向上に必要である。

5 単元全体を通して

単元を通して、学んだことや考えたことを振り返りに書く時間、書いたことを交流し気づいたことをメモして意見を言う時間を確保することが語彙の質を上げるためには重要であった。検証を行う中で、獲得した語彙を活用することにつながる大切な時間だったと考える。また、指導事項や学習用語をめあてに組み入れることで、生徒は段落の構成を知ることとはどういう意味があるのか、どんなことに生かせるかといった学びを明確にできたと感じる。振り返りもめあてを意識すれば学びを再確認できる。そして言葉カードをそばに置きながら相手に伝えることを意識して言葉を使い言葉を吸収しようとしていた。検証の5時間を通して生徒同士が他の表現に注目し、聞いたり質問したりする姿を見取ることができた。

今回は説明文で授業を展開したが大きな枠としてはどの単元でも活用することができる（図 11）。単元終了後生徒は「違う言葉をもっと知りたい／言葉カードに使いやすい言葉があるといい」と、表現することに対して意欲的な発言をしていた。生徒は自分の考えを伝えたい、わかってもらいたいと常に思っているのだと再確認させられた場面であった。本研究において言葉カードや学習用語は言葉に注目させ交流し語彙力を向上する手立てとして用意した。しかし、今後は生徒自身が主体的に相手の言っている内容を理解し、共感したり参考にしたりできるよう常に言葉に敏感な授業を行うことが大切だと感じた。教室に辞書を常備し、言葉カードに自分なりの言葉を書き足していくなどそんな授業を継続的に展開していけば言葉への自覚を高め語感を磨くことができ、さらなる語彙力の育成につながると考える。

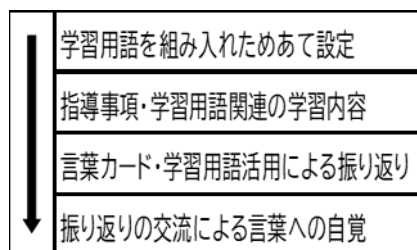


図 11 授業展開の大枠

V 成果と課題

1 成果

- (1) 言葉カードを表現の手助けとして活用し、振り返りを書くことでわかりやすく伝え合うためにどうするか、どんな言葉を選ぶかといった言葉への自覚を高め、語彙の獲得や活用する力の育成と向上を図ることができた。
- (2) 振り返りをまとめるとき学習用語を活用することで、何を学んだかを再確認でき、自分の考えや思いを深めながら言葉を意識して表現することができた。
- (3) 振り返りの交流で言葉の共有を図り多くの語彙に触れる機会としたことで、表現しようとするときに他者からの学びを生かし活用することができ伝え合う語彙力の育成につながった。

2 課題

- (1) 言葉カードの言葉をうまく活用できない生徒もいることから学習内容に応じて使える言葉カードの改善と年間を通して継続的な指導が今後必要である。
- (2) 交流を通して語彙への自覚や学びを深めていることから、振り返りの交流を充分にするための時間の確保が必要である。

〈参考文献〉

- 工藤哲夫・中村和弘・片山守道 2019 『学習用語で深まる国語の授業 実践と用語解説』 東洋館出版
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領（平成29年告示）』 東山書房
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』 東洋館出版
- 石黒圭 2016 『語彙力を鍛える一量と質を高めるトレーニング』 光文社新書
- 高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春 編 2015 『国語科重要用語辞典』 明治図書
- 三浦和尚 2009 「子どもの物語としての見通し・振り返り」『三省堂国語教育 ことばの学び Vol.19』 三省堂
- 井上一郎 2003 『語彙の発達とその育成』 明治図書

〈参考WEBサイト〉

- 文部科学省 2020 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 中学校国語」
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>（最終閲覧2020年7月）
- 中央審議会答申 2016 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（報告）」
https://www.mext.go.jp/content/1377021_1_3.pdf（最終閲覧2020年7月）
- 文部科学省 2018 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm（最終閲覧2020年7月）
- 文化審議会国語科分科会報告 2018 「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」
<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/wakariau/index.html>（最終閲覧2020年7月）
- 国立教育施策研究所 2011 「交流活動を工夫し活用する力を育成する取組の実践例」
<https://www.nier.go.jp/10zireishuu/>（最終閲覧2020年6月）
- 文化審議会答申 2004 「これからの時代に求められる国語力について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf（最終閲覧2020年6月）